

御伽草子の国語学研究の歴史

染谷裕子

I はじめに

御伽草子に関する研究は文学のみならず、宗教や民俗学や美術あるいは文献学等さまざまな分野からのアプローチが見られる。それらの研究が互いに連動しつつ着実な業績をあげているといってもよい。今日に至るまで、「御伽草子研究史」というべきものが、何度かとりあげられてきたのも、その一つの証拠といえよう。ただし、言語の立場からの研究についてはどうか。

今、一番新しい御伽草子の研究文献目録である、林雅彦編「御伽草子研究文献目録抄」〔『解釈と鑑賞』61―5・平8・5〕を例に見てみると、昭和六十年以降の研究論文三七〇本余があげられているが、このうち国語学的立場からの研究は二〇本に満たない。石川透「御伽草子研究の軌跡と展望―昭和六十年以降―」〔前掲雑誌〕では、索引四点をあげる他、研究書としては、今西浩子『御伽草子の言語』（平5・和泉書院）をあげるが、研究論文では国語学研究を全くとりあげていない。ここで、今西の著書について「御伽草子の国語学的な面からの研究が極めて少ない現在、貴重な文献といえよう」（傍点筆者）と評するが、傍点部からも国語学研究の現状がうかがえる。

過去における研究史の展望等においても、国語学の研究がとりあげられることはなかった。本稿では、「極めて少ない」と指摘される国語学研究の歴史を振り返りながら、その問題点と今後の課題について述べたい。

なお紙幅との関係で、昭和三十年代及び四十年代は簡略に記述する。また、本文中の名称は一般的に呼ぶ場合は「御伽

草子」としたが、各論文ではその呼称によるものとする。

II 昭和三十(一九五五)年以前の研究

明治末年に平出鏗二郎、藤岡作太郎の両氏によって、御伽草子の本格的な研究が始まり、昭和二十年以前にすでに島津久基、笹野堅、横山重、筑土鈴寛、野村八良といった優れた研究者による業績が見られる中で、御伽草子を国語学的に研究した論考は次の二本のみである。

小山朝丸「お伽草子(附、室町時代短編小説)の語法について(一)(二)(三)(四)」(『国語国文の研究』20・32・34・38・昭3・5、昭4・5、7、11)

黒田亮「奈良絵本文正草子について―特に之を中心を考察した室町時代の語法」(『文学』3-1・昭10・1)

小山は、お伽草子を「王朝時代の源氏狭衣等を継承し、次の時代の仮名草子浮世草子の先蹤をするもの」と考え、山崎麓・尾上八郎『校註日本文学大系第十九』(大正14年・国民図書)四十七篇及び室町時代短編小説五篇を対象に、その語法について調査した。連体形終止、助動詞の誤接続、二段活用的一段化、ハ・ヤ・ワ行の混同など、語法の交代期に位置するお伽草子の時代性と、資料の性格をうかがうことができる。

以上のほか、文章については、西川尚顕「お伽草子の文章」(『解釈と鑑賞』3-3・昭13・3)、野村八良『室町時代小説論』(昭13・巖松堂)がある。

III 昭和三十年代(一九五五―一九六四)の研究

昭和三十年十二月、市古貞次『中世小説の研究』(昭30・東大出版会)が世に出て、同じく市古の校注による『御伽草子』(日本古典文学大系三十八)が出版されたのは昭和三十三年のことである。享保頃に大坂、心斎橋の書肆、渋川清右衛門が叢書の形で刊行した、いわゆる「渋川版」二十三編以外に五編を収めるテキストであり、この叢書が以後の本格的な国語学研究を生み出すきっかけとなったが、昭和三十年代の論考は次の二本のみである。

高乗勲「秋夜長物語の成立について」〔『文芸研究』35・昭35・7〕

有馬幸子「御伽草子における助動詞の用法」〔『国文』20・昭38・12〕

有馬は、御伽草子二十六作品（古典大系本所収作品のうち『二十四孝』と『猫の草子』を除いたもの）を対象に、助動詞の接続・活用形・使用頻度に重点をおいて考察し、中古から中世に至り、文語文においても口語の世界のように変化が認められることを指摘した。

IV 昭和四十年代（一九六五—一九七四）

古典大系本を対象にした国語学研究が少しずつふえていく。それまでの語法・文章の分野以外に、語彙の研究が加わった。昭和三十年代、四十年代の国語学的研究によって、御伽草子の語法・語彙・文章の大体の輪郭をとらえることができる。が、その考察の対象がほとんど渋川版を中心とするものであった。

敬語に関する論考として、荒井嘉子「御伽草子における待遇表現の研究」〔『国文』30・昭44・3〕、清野いつ子「御伽草子」における「の」と「が」について」〔『日本文学ノート』・昭45・3〕、佐藤茂「御伽草子・仏教文学の敬語」〔『敬語講座3』所収・昭48・明治書院〕がある。

語彙に関する研究として渋谷三千代「御伽草子」の漢語の研究」〔『宮城教育大学国語国文』3・昭47・3〕がある。渋川版二十三篇を対象に語彙を本格的にとりあげたものである。漢語の多くは前代から引きつがれて用いられているもので、室町時代になってから見られる語は、全体の二三％程度で、この多くは通俗的な漢語と推定されるという。その他、古保勲「室町時代のことわざ——狂言、室町時代物語集を中心として」〔『密田教授退官記念論集』所収・昭44・3〕、築瀬一雄「清水冠者物語試論——絵と歌と常套的成句とについて」〔『軍記物語とその周辺』早稲田大学出版部・昭44・3〕、吉田敬司「お伽草子の文章——四季づくしについて」〔『中世近世文学研究』5・昭46・11〕も引用・類型表現から見た文章研究といえる。

また、佐藤喜代治『日本文学史の研究』（昭41・明治書院）や亀井孝編『日本語の歴史4 移り行く古代語』（『御伽草子』

にとらえる時代の口語」(昭49・平凡社)で、御伽草子の文章や語彙にふれる。

なお、昭和四十八年、文学の分野では画期的な論文が発表された。松本隆信「伝本から見た御伽草子二十三編について」(『国書学論叢』昭48・5)である。松本は渋川版二十三篇のそれぞれの多くの異本を調査し、本文対照の結果、渋川版は「江戸時代における改作とも言い得る」ものであり、それらを「室町時代物語のテキストとして扱うことには、慎重な用意がなければならぬだろう」とし、それまでの文学研究に大きな影響を与えた。

V 昭和五十年代(一九七五—一九八四)

研究論文はIVに比べ増加する。この時期は、語法研究より、表記・語彙・文章研究が目立つ。また、IVの松本隆信の論文を受け、国語学研究においても、その特色である異本の問題は避けて通れないということの反省と、よりよいテキストの出現によって渋川版以外の研究も増えつつある。

小池清治「小男」「ひき人」と「一寸法師」——古奈良絵本・御伽草子の語彙——(『フェリス女学院大学紀要』11・昭51・4)は主人公の名付けの推移から伝本の年代を推定することを試みたものである。

武田孝「御伽草子における「侍り」の用法」(『解釈』22—11・12合併号・昭51・11)は、渋川版の御伽草子に見られる「侍り」を「候ふ」と比較しながら、その用法を考察したもので、「侍り」の用いられる位置(会話は文末、地の文は冒頭)に注目して、「侍り」は擬古的な表現を意図した用法というより、読者を意識した丁寧語と解してよいのではないかとする。

石井みち江「室町時代物語の表記に見る開合音の消滅過程」(『国語学研究』17・昭52・12)は、室町時代物語四十九本(平仮名主体で書かれ、書写年代が明らかなもの及び推定ができる作品)を選び、その開合音表記について調査した結果、開合の混同は天正頃から急激に増え、開合消滅時期を従来の説より早めて慶長ごろと推定する。

同じ石井の「室町時代物語『朝顔のつゆ』『天狗の内裏』の国語資料としての位置」(『国語学研究』22・昭57・12)は、書写時期が一五〇〇年頃の『朝顔のつゆ』と『天狗の内裏』に開合及び四つ仮名の混同例が多く見えることから、その国語資料としての価値を検討したもので、これらの文献は地方色の濃い文献というよりも、十六世紀の文献として貴重な

ものではないかと述べる。

この石井の研究には方法論として二つの意義がある。第一の意義は、御伽草子を渋川版以外のテキスト、しかも書写時期が明らかかなものに限定したことである。テキストの書写時期に注意を向けたのは、国語学研究でははじめてのことである。石井以後、渋川版以外に目を向けた研究が増えてくる。

そして、第二の意義は、中世平仮名文という御伽草子の表記に注目した点である。特に、この視点は国語学研究ならではの分野であり、音韻・表記の研究が続き、これらの業績は伝本の年代推定や諸本の関係指摘などに関わっていくものと思われる。

仮名の字母に注目した論考として、岩井田満「中世における仮名使用の研究——奈良絵本の仮名使用を中心に」(『玉藻』14・昭53・10)がある。岩井田は、字母数が多いものは小型奈良絵本より、絵巻・大型奈良絵本に多く、これらの成立が古いことが予想されるとする。また奈良絵本では二字母が最も多く、これは「見た目を美しくしようとしたあらわれ」と関連するという。字母の種類は作品や伝本によって個性もあるようなので、今後伝本変遷などを考える上で、その成果が期待される。写本・版本などの字母は今後の課題となろう。同じく奈良絵本を対象にしたものに、崎村弘文「御伽草子の表記体系(一)」(『文献探求』9・昭56・12)があり、四つ仮名・オ段長音の開合など仮名遣いに関わる表記を列挙して示した。

高橋宏幸「室町時代の口語資料小考——『鼠の草子』絵詞の口語」(『垂水(北海道教育大学釧路分校国語研究室)』28・昭55・4)は、画中詞を国語学的に初めてとりあげたもので、東京博物館蔵の『鼠の草子』絵巻が多分に口語的であることを指摘した。

さらに、高橋にはこの時期に二本の論考がある。「諏訪縁起(霧島地方伝来本)における方言(俗語)混在説について」(『釧路論集』12・昭55・12)は、『諏訪縁起(諏訪の本地)』の一部の伝本に、中世霧島方言が混在しているという指摘に対して、その根拠となった「ばし」「おらく」「なをる」の三語について、「中世において九州のみの方言であった語ではなく、中央においても用いられた語であること」を用例を以て実証した。

また、「国語資料」としてみた伝阿仏尼筆西行物語——中世的音韻事象の古例」（『国文学論考』18・昭57・12）では、鎌倉中期書写と言われる静嘉堂文庫所蔵・伝阿仏尼筆『西行物語』が、四つ仮名やオ段長音の開合の混乱、助動詞「ず」の連体形「ぬ」の「ん」表記、中世後期とされている語形が見えるといった事象がある程度まとまって認められる点から「音韻史的諸事象を具現する貴重な文献であり、国語史の常識をゆるがすような一資料」とする。

高橋宏幸の研究も二つの点で注目すべきである。まず、御伽草子の画中詞に目をつけた点である。そして、内容のみならず、その形態や成立時期も広範な御伽草子をひとまとまりと見るのではなく、一作品または一伝本の国語資料としての性格を考察した点である。文学研究においては作品研究は活発になされているが、語学研究としては高橋以前にはほとんど見られなかったと思われる。いわば御伽草子（特に渋川版）を一時期の一作品のように扱ってきた向きがある。その意味でも、今後高橋のような研究は必要とされるし、事実昭和六十年代に入って増えつつある。

また、広く表現の立場からの藤掛和美の研究がある。「お伽草子の類型表現——お伽草子文体論のために」（今井文男編『表現学論叢』中部日本教育文化会・昭55・7）は、渋川版二十三編を対象に、類型表現を指摘し、その中で、もっとも共通性が顕著な美人の形容について検討したものである。美人の形容表現は、お伽草子に多く、しかも類型化が著しい。それらは先行作品の表現を利用しているが、それなりの工夫をこらし組み合わせる表現する。その際、もっとも近い表現を持っていたのが『源平盛衰記』であるが、ここでは類型化はしておらず、お伽草子において類型化が行われたと指摘し、そして、これらの表現はその類型性・紋切り型ゆえに、却ってお伽草子の享受者に共感呼びその大衆性を支えたのではないかとする。なお、お伽草子の表現に関する藤掛論文は、この時期「浄瑠璃物語の「大和言葉」（『豊田高専紀要』14・昭56・11）、「謎言葉より見た渋川版御伽草子の複合性」（『芸文東海』1・昭58・6）がある。これらの論文は後の『室町期物語の近世的展開——御伽草子・仮名草子論考』（昭62・和泉書院）に収められるが、藤掛の研究は、近世初期小説研究の立場から、「近世初期小説史において共存しえた「御伽草子」「仮名草子」に内在する「中世的なるもの」と「近世的なるもの」の位相を究めようとするもの」であり、渋川版に対するアプローチの仕方が明確である点に注目すべきである。

松本宙「御伽草子の語彙」(『中世の語彙』(講座日本語の語彙④)所収・昭56・11・明治書院)は御伽草子の漢語・俗語・人代名詞の語彙について概説したもので、文法的な面についてもふれる。

中島由美子「御伽草子」の語彙について」(『国語国文学会誌』25・昭57・3)は渋川版各作品における延べ語数と異なり語数を調査し、その品詞比率を出して、大野晋の基本語彙に関する論を適用し、考察したものである。

大石亨「御伽草子の漢語についての一考察」(大阪大学『語文』44・昭56・11)は『福富物語』(赤木文庫絵巻)『さるげんじ』(赤木文庫丹緑本)『三人法師』(赤木文庫丹緑本)に見える漢語を考察したもので、数量的考察については、IVの渋谷三千年の論文と同様傾向といってよいが、それらの漢語のうち、中世以降に新出の漢語の特色として、第一に、中世の戦乱・乱離の世相とそれによる人々の苦悩、個人を束縛する統制的・集团的風潮や金権主義の横行といった時代の精神が反映しているとし、第二に、和製漢語・本来の中国語と意味が異なる語・漢字がわからないために語義変化を生じ、別の漢字をあてた語などが目立つという点をあげる。

沢井耐三「鴉鷺合戦物語」表現考―悪鳥編」(『国語と国文学』59―7・昭57・7)や「鴉鷺合戦物語」表現考―神仏編」(『国語と国文学』60―10・昭58・10)は、御伽草子の擬軍記物の傑作『鴉鷺合戦物語』(テキストは尊経閣文庫蔵文緑本)において、細部の表現を検討しその特徴を考察した。「悪鳥編」では禅語の頻用、随所に閃めく機知、雑知識に対する旺盛な関心を指摘する。これらの表現の特徴から、作者像または読者像がかなりうかがいあがってきたといつてよからう。方法論こそ違え、言語研究も、こうした個性的な作品を対象とすることによって、「擬古文の中にちりばめられた口語的表現」なる見解から、また新たな段階に進んでいくのではなからうか。

三浦法子「御伽草子」の係助詞」(岡山大学『国文論稿』12・昭59・3)と坂詰力治「御伽草子」の文章」(『武蔵野文学』32・昭59・12)は、係助詞・係り結びという観点から渋川版を中心に考察したものである。

三浦・坂詰の両論を合わせると、渋川版において、係り結びは、一般的に法則にかなっていないが、その係助詞の傾向からみると中世的傾向が強いということになる。しかし、御伽草子の伝本によっては、古いものでも法則をはみだしている度合いが大きいものもある。従って、法則にかなった結びは渋川版当時の規範意識ともいえるかもしれない。坂詰の

報告はその点に中心があるとみてよい。ただし、渋川版もまた作品によっては「法則にかなっていない」とはいえない作品があるという報告（Ⅶの今野真二論文）もあり、渋川版対象の研究も作品レベル及び他の伝本との対照という次なる段階に進む必要があるといえよう。

佐野（染谷）裕子「御伽草子に現れた異色の語形をめぐって―その史的価値と意味」（『国語と国文学』61―8・昭59・8）は、広義の御伽草子には、時に誤写と判断される多くの異色の語形が現れるが、これらは単なる誤写ではなく書写当時の口頭語の反映と考え、これらの語形が時代の下る伝本で消滅していくという傾向を捉え、御伽草子本来の性格が伝本の変遷過程で失われつつあること、近世での言語に対する規範意識の広まりつつあることを反映している可能性を指摘した。

Ⅵ 昭和六十年以降（一九八五―一九九四）の研究

量としては前年並だが、索引が四点、国語学の研究書（今西浩子『お伽草子の言語』平5・和泉書院）が初めて世に出たことを特記すべきであろう。索引のうち、二つは語彙索引で、一つは、『御伽草子草子集』（小学館）の一部の作品を対象にした、齊藤美知『御伽草子集』自立語索引（一）（『国語論究』1・昭61）、もう一つは岩波古典文学大系を対象にした、榊原邦彦・藤掛和美・塚原清編『御伽草子総索引』（昭63・笠間書院）である。なお、今西浩子はこの二点の索引が、見出し語の選び方などの点でかなりの違いがあることを指摘している（『お伽草子の言語』）が、索引にあたる際に、大変参考になる。文節索引としては、武山隆昭編『秋月物語文節索引』『二本対照伏屋物語文節索引』（平5）が出たが、二作品とも御伽草子の典型作品であるにもかかわらず、国語学研究としては活用されていない点が残念である。

佐野（染谷）裕子「御伽草子絵巻の絵詞」（お茶の水女子大学『人文科学紀要』第38巻・昭60・3）は『室町時代物語大成』既刊分十一冊に翻刻された十九伝本の画中詞を対象にその語法について考察したもので、画中詞には、話し手の感情を出来るだけ直接に表現しようとする意向や、絵に付随しているゆえの表現の特性が見えるとした。また、特に古物語の影響を離れた場面や異類物に、詞章には見えない口頭語がしばしば現れることを指摘した。

前田富祺「中世語彙の体系—御伽草子における衣生活語彙を中心に」(『日本語学』4—5・昭60・5)は、衣服の総称としての語彙は、当時「きもの」という語彙が日葡辞書等によって一般的であったと考えられるが、御伽草子の時代は「衣装」から「きるもの」への交替期であったとする。一方、御伽草子では「肌の小袖」「上の小袖」「袴」の三種が描写の体系の基本であるが、平安時代は「重桂」「表着」「唐衣」「裳」の四種が中核をなす点において異なる。御伽草子では「小袖」がキーワードと言え、中世後期は小袖の位置が高まってきた時代であることの反映とみる。

今西實「御伽草子の文体・語法」(『解釈と鑑賞』50—11・昭60・10)は、「御伽草子の文体・語法」について述べるといよりも、御伽草子のそれまでの国語学的アプローチの仕方について批判を述べたものといつてよい。特にそれまでの国語学的研究が渋川版のみを対象としてきたことに疑問をなげかける。今西は「広範な素材の作品群の内包する諸要件に対する顧慮や、何よりも、まず、本文とからみあった挿絵や、挿絵中の挿入句がどのように文章の展開や性格に係わっているかの視点が、文体論の前提として把握されるべきではないかと考え」、絵(及び画中詞)・異本・伝本の形態に注意を向けた文体研究を提起する。

また、語彙や語法のそれまでの渋川版に関する研究成果を通して「俗語や口語的表現が多出する」「中世文語の全般的変遷をあらゆる面でみせていると考えられる」としながらも「作品ごとにその様相が異なることは留意すべきであろう」とする。

今西實の提言は、これからの言語研究において心しておかなければならない。

菅原えみ子『物くさ太郎』の語彙—形容詞を中心に(『群女国文』13・昭60・10)は『物くさ太郎』(渋川版)の形容詞を中心に、現代語彙とのかかわりについて考察したものである。

坂詰力治には、この時期、形容詞に関する三本の論考『御伽草子』の美的表現——うつくし・いつくしをめぐって(『日本語学』4—12・昭60・12)、「御伽草子の形容詞について—その語彙史の変遷の過程を踏まえて」(『文学論藻』60・昭61・2)、「接頭語「御」を冠した形容詞の敬讓表現について—お伽草子を中心として—」(『近代語研究』第七集所収・昭62・2)がある。これらは、Vの論文と共に、後の『国語史の中世論攷』(平11・1・笠間書院)に所収されている。テキ

ストは岩波古典大系である（一部は渋川版のみ）。

いずれも、擬古文の伝統を継承しつつ、当代の用法をまねがれなかったという結論とみてよい。御伽草子において注意すべきは、この後半部分である。俗語性の強いものは避けられる傾向はあるが、坂詰の結論を見るかぎり、複合語や「御」や「もの」を冠する形容詞が数多く出現する。今西浩子は複合語等を御伽草子の特色としてみなし、そこに御伽草子ゆえの工夫があるとしている（『語彙から見たお伽草子の分類』）。「誰にでもわかる新しい文語文」をめざしたものとして、御伽草子を見直す研究もあってもよいように思うが、いかがであろうか。

松本宙「中世における慣用句類型表現の変容」（佐藤喜代治編『国語論究1 語彙の研究』・昭61・5）は中世の文献に多く見られる類型表現が、個性に乏しい表現でありながら、使用されるうちに少しずつ変形し、意味変化さえ起こすという実態を具体例を以て示したもので、その中心は「室町時代物語」であるとする。

岡田啓助「室町時代物語巻末部の本文について―「小町草紙」「物くさ太郎」「木幡ぎつね」「浦島太郎」―」（『帝京大学文学部紀要』18・昭61・10）は「古い形の本文は、文章・内容ともに単純素朴な読み物であったが、伝承されるにつれて、教育的な本文が付加されていったのであり、その最たるものが御伽草子本の本文である」と指摘する。版本を言語資料とする場合の注意ともなる。

小楨八重「室町短編物語『おようの尼』の国語」（『国語国文論集』（安田女子大学）17・昭62・6）は東大図書館蔵『おようの尼』を国語学的に考察した。基本的には伝統的な表記法を保ちながら、オ段長音の混乱、二段動詞の一段化などが見られ、語彙も軍記と同じような中世的特色が見られるとする。

米井力也『『ささやき竹』の笑い―「かもじ」という語をめぐる』（『金蘭短期大学研究誌』18・昭62・12）は『ささやき竹』にある「かもじ」の意味について考察したもので、ことばの意味の変化が本文の改変と関連し、それによって本来あった深い味わいがなくなること指摘しているが、伝本の変遷と言語の変遷が関わるという一つの証拠といえよう。

石井久雄「仮名文2 御伽草子」（『漢字講座』6 中世の漢字とことば）（『明治書院』所収・昭63・11）は、平仮名（主体の）文としての御伽草子の漢字表記について述べたもので、漢字の種類やその比率は大体一致しているが、一方で漢字比率

の高いものがあり、それらは、漢語の漢字表記とかかわるものであって、漢字が特別な地位を得てきた時代が反映されるのだが、一方江戸時代になってからは、それらの漢語が逆に仮名書きされるといふ自体が生じている、という。資料は明らかに中世の書写にかかる伝本で、漢字まじり平仮名文に限定し、数本の伝本（作品）を選択している。

建石美砂「室町時代物語「狭衣の中将」における仮名文字の使用状況」（『論輯』〈駒沢大学院〉16・昭63・2）は、Vの岩井田論文と同様に仮名の字母をとりあげたもので、『狭衣の中将』（慶長二年写本）の仮名文字の使用状況を調査報告した。石井論文・建石論文共に、言語史の問題のみならず、伝本や作品の個性をはかるものとしても、今後期待される分野である。

篠田陽子「文正草子にみる「めでたし」の位相」（『昭和学院国語国文』22・平成1・3）は、作品論に位置づけられるものであろうが、「下の者が上昇した、その瞬間にこそあてはまられることば」という『文正草子』の特異な「めでたし」が、すでに指摘のある「たのし」のように実はこの時代の意味的な偏りを持っていたとするならば語彙論としてもおもしろい。他作品や他の伝本との比較がのぞまれる。

今西浩子「語彙からみたお伽草子の分類」（『国語語彙史の研究』十・和泉書院・平1・12）は、岩波古典文学大系所収の二十八作品について、『御伽草子総索引』（笠間選書91）を使用して、各作品の自立語の異なり語・延べ語を調査し、統計処理によって、作品間の類似度を考察し、語彙によって御伽草子を四類に分けた。お伽草子の語彙の類似度を統計的にとらえ、分類した結果が、必ずしも文学内容の分類と一致していない点に興味深い。なお、共通度の高い語はあまり多くなく、一つの作品にしか見えない語は、総異なり語数の六十五%も占め、お伽草子の語彙の特色として「横への広がり」ということ、また、派生語・複合語の多さを指摘する。

染谷裕子「御伽草子の共通語」（『調布日本文化』創刊号・平3・3）も語彙の類似度についてふれたものである。広義の御伽草子の中から、その中核を成す「御伽草子らしい」作品を、伝本の形態等（異本が多い・絵がある・江戸初期以前の写本がある）の視点から二十作品選びだし、作品間で共通性の高い語を抽出し、時代や性格の異なる資料と比較する。その結果、共通度の高い語群の中で「御伽草子らしい」語は決して多くはないが、その表現や内容と関わりの深い語であり、

これらの語によって一つの御伽草子のストーリーが予想されうるものであることを指摘した。また、これらの語は必ずしも渋川版二十三編の共通度の高い語とは一致せず、特に渋川版では仏教語や悲しみ・苦痛を表す語が消えつつあることを指摘した。

なお、染谷には「御伽草子の「いたはし」」(『調布日本文化』2・平4・3)もあり、前の論考でとりあげた「御伽草子らしさ」を表す語の中で、特に共通度の高い語「いたはし」をとりあげ、類義語と比較することにより、「いたはし」の意味の特色について考察し、それが、御伽草子の特色及び時代性と密接な関わりがあるとした。

井藤幹雄『秋夜長物語』の語法(『大阪明浄女子短大紀要』5・平2・3)は一作品『秋夜長物語』の永和三年(一一三三七)書写の伝本(テキストは岩波大系本)の語法を記述的に示すことにより、室町時代前期の語法の一部を明らかにしようとした。

田中司郎「御伽草子」の禁止表現―「な…そ」「…な」について(『宮崎女子短期大学紀要』18・平4・3)は、古典大系所収の御伽草子について、「な…そ」が劣勢になり「…な」が主流になっていくこと、「…な」について終止形以外に連体形(連用形もあり)に接続する例が若干あり、時代的傾向が見えることを指摘する。

小林健二「山鹿物語」の語り物的性格―文体の考察を通して(『大谷女子大学国文』22・平4・3)は『山鹿物語』(『てこくま物語』)の語り物的な性格を、語り物特有の決まり文句に着目して、その文体上の特質から考察したものである。結論としては語り物的要素が濃厚といえるとする。

今西浩子『お伽草子の言語』(和泉書院・平4・5)は御伽草子の国語学研究に関する唯一の著書である。内容は「お伽草子の名称とトギの語義」「お伽草子の分類」「お伽草子の語法」「お伽草子の語彙」「お伽草子の異本」「お伽草子の索引二種について」の六章からなる。

第一章は、従来論議されてきた「伽」の語源について、古辞書の事実から「解き」と切り離れた上で、お伽草子の命名の根拠は「解き」であるという説を提唱する。すなわち形態等からいわれるようにお伽草子は一種の「絵解き」である。ただ、命名者は世間で通用していた「伽」の意味をそこに掛け合わせて用いたのではないか、とする。

第二章は先にふれた『国語語彙史の研究十』所収論文によるのでここでは省略する。

第三章は「抄物との比較を中心として」「御——あり」をめぐっての二節からなる。第一節では、古く小山朝丸が考察した御伽草子の語法と、湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』でとりあげた抄物の語法と対照した結果、「お伽草子の語法は、抄物ほどには口語的になっていない」ことを指摘し、「全体的には擬古的であるが、それでも連体形止めとワ、ヤ、ハ三行の混同は時代に逆らえなかったものとみえ、お伽草子の語法の中の近代的な部分になっている」とする。第二節では、お伽草子にしばしば見える「御：あり」「御：候」が、だんだん形式化し、尊敬語から丁寧語へと変化をとげ、「御座候」へ、さらに口語表現「ござる」につながる形なのではないか、とする。

第四章では「お伽草子語彙の品詞分類」「数詞語彙」「服飾語彙」「花鳥風月」からなる。第一節では古典大系二十八作品の品詞別統計を掲げ、宮島達夫『古典対照語い表』と比較する。その実態から「お伽草子の文章は筋書きに重点が置かれ、描写、叙述の点に関しては変化に乏しい、という従来も言われてきたことを裏付けたことになるであろう」とする一方、副詞の比率が高いこと、動詞が異なり語のわりにのべ語が多い点等が「口頭表現との関わりか」と指摘する。第二節以下は、分野に限って語彙の特色をみたもので、語彙の一覧をあげる。数詞については「(八が多いと言われるのに対して)三が多くなっている」、服飾語彙に関しては当代の反映として「小袖」が見え、「花鳥風月」では「風流はもっぱら花と月とに托される」等と述べる。

第五章では「お伽草子の異本と語彙の相違」「文末表現と異本」「別本 ぶんせう」の文章表現」からなり、文正草子の三つの伝本、大系本(渋川版)・別本(フォッグ美術館蔵)・京大本(京都大学所蔵)を、語彙・語法面で比較し、さらに別本の特殊性について述べたものである。語彙面では、単独語彙の占める比率の高さが、『和泉式部日記』の三異本に比較してあきらかにお伽草子の方が比率が高く、諸本の伝承において、中古とは違うかなりの自由さがあったと指摘する。第三節では、特に別本に焦点をあて、「侍り」を会話文で頻用、数詞のうちめでたい「一、三、七」を頻用している点から、「粉飾の一端」が見えるのでは、と指摘する。第五章については先にふれたので省略する。

「はしがき」によれば先行研究に学ぶところはあっても「お伽草子の言語について全体像が見えてこない」、決して多

くない国語学研究の上では「御伽草子の国語学的研究が意義あるものか、またないものかも、全体像を捉えた上で考えていくべきものではないか」と考え、本書は「研究以前の輪郭づくり」に重点を置くとする。御伽草子の個々の作品についての研究が多くなりつつある一方、やはり指針となるのはこうした全体的な研究であると思う。渋川版を中心とする国語学的研究は今西によって、一つの段階に達したともいえよう。第四章で、異本の問題にふれ、次なる段階を示唆している点は興味深い。

藤掛和美「御伽草子における「物の具」語彙について」(『名大國語国文学』71・平4・12)は、渋川版の「物の具」語彙を調査し、『日本常民生活索引』に描かれる「物の具」語彙と比較することにより、御伽草子の「物の具」語彙(特に「娯楽・遊技・交際」に顕著)に「貴族的物語の世界の位相」を見ることができ、これは、「嫁入り本」とも言われる渋川版が購入可能なのは裕福な町人・大名・公家であり、特に町人の子女が願ったのは貴族世界であったことも関連するといふ。

染谷裕子「侍」と「候」——広義の御伽草子の場合(『調布日本文化』3・平5・3)は、広義の御伽草子四百篇余りについて、対者敬語としての「侍」「候」の使用状況から六つに分類し、これらの分類と、従来の分類との関連、伝本の年代や形態との関連、さらに二語の使用差についても考察した。御伽草子の会話文では「候」多用が普通であり、その勢力が「侍」を衰退に追いやる傾向がある一方で、新しい伝本では近世の雅語意識から「侍」復活へという逆の傾向も見え、二語の使用状況は複雑な様相を見せているとした。

ところで、この時期、鎌倉時代物語(中世王朝物語)の研究が盛んになってきたが、その言語学的考察が御伽草子においても参考になる。田淵福子に『松陰中納言物語』の成立(『甲南国文』33・昭61・3)、『松陰中納言物語』における敬語の特殊な用法について(『解釈』33—1・昭62・1)がある。

田淵の論は鎌倉末から南北朝の成立とされている『松陰中納言物語』の成立時期を室町時代まで引き下げるべきであると述べるものであるが、その考証にあたって、比較資料として、中古から中世(時に近世)までの文末の助動詞、係助詞及び係り結びの状況、已然形終止の状況、敬語等を綿密に調査したものは、擬古文の文体史を考える上で、たいへ

ん参考になる。ここで成立時期を引き下げる要因になる言語事実の多くは御伽草子の先行研究でも指摘されているが、「り」を基調とする文体や「啓す」の誤用などは今のところ御伽草子での指摘はない。田淵は室町期においても中世王朝物語は引き続き制作され、「ごく一部の読者の間でも読まれる物語として生き続け」、同時期に別の流れとして、同じく王朝物語の影響を受けるが「広く読まれる物語」としての御伽草子があると考え、中世王朝物語と御伽草子は「何よりも王朝物語に対する姿勢」が異なると指摘する。(大槻修・神野藤昭夫編『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社・平9・「第三章 中世物語の特質」第三節 表現)このあたりの指摘が御伽草子の特に擬古物語系統の作品を扱う場合、重要な参考となろう。

なお、この期間に徳田和夫『お伽草子研究』(昭63・三弥井書店)が出た。現在の御伽草子研究の頂点と評されるこの書には、文学という分野にとどまらないさまざまなテーマのもとに、著者の論考が収められている。どのような立場であれお伽草子を研究する者にとって必読書である。言語史そのものについての論考はないが、画中詞や口承性にふれる時大いに参考になろう。

VII 最新の研究(一九九五―)

出雲朝子「中世末期における東国方言の位相——『鼠の草子絵巻』の絵詞をめぐって——」(『国語と国文学』72―11・平7・11)は、なぜ『鼠の草子絵巻』に東国方言が見られるのかを考え、中世末期における東国方言の位相を論じようとしたものである。先行論文としてVの高橋宏幸の論考とVIの佐野(染谷)裕子の論考がある。高橋は、画中詞が多分に口語的である点について指摘したが、それらを安易に東国語の反映とみなすことには否定的な考えを述べ、染谷は東国語の反映ではないかと述べたにとどまった。これに対して出雲は、諸本を照らし合わせ、東博本・サントリー本等で、助動詞「ない」「べい」(意志)、「だ」や促音便が見えること、二段活用 of のすべてが一段化していることを抄物等の資料をもとにこれらが東国語であることを実証し、なぜそれが見えるかを論じた。さらに、東国語の使用が「男女とも運搬・料理など雑事に従事する下級の家来・使用人」に見られる点に注目して、当時の「京阪地方においては、男女とも下級

使用人に東国出身者が多く、その階層の一つの言語的特徴をなしていたのではないか」とし、「東国方言の諸要素は、当時の京阪地方の一部をなしていたのであって、それは端的に言えば下層使用人階級の用語だったのではないか」とする。そして、東博本等が「東国方言を巧みに絵詞に取入れることによって、ことばの上で下層使用人階級らしさを表現し」とたどみる。また、天理本や天理別本にこれらの東国語が見えないのは絵詞と現実の言語との距離の問題によると考えられるとする。

同じく、『鼠の草子絵巻』諸本の画中詞における人称詞と敬語―性差の観点を中心に』（『青山学院短期大学紀要』50・平8・12）では、『鼠の草子』の絵巻三点をとりあげ、人称詞と敬語について男女のことばのちがいについて考察している。（なお、桜井本の翻刻を付している。）

この画中詞に早く注目したのは岡見正雄であり、特に会話体を写した画中詞に、たとえば「こういう絵の中の詞句は間々室町時代的な、口語的な表現をとっていたのであり、そんな絵の中の詞句にこそ生々いきいきとした室町人のところ、私の詞を以てすれば、室町どころが生きていたのである」（『御伽草子―絵草子の問題に関して―』『講座日本文学』第六巻 昭44・三省堂）といった指摘を重ねてしてきた。絵との関連についての考察が進んできた文学の分野からは、絵・画中詞・本文を持つ御伽草子において二者の関係の重要性が説かれる一方で、その言語の性格についての指摘がなされている。たとえば、美濃部重克は『稚児今物語』で本文では「侍」を用い、画中詞では「候」を用いる点に注目し、『ロドリゲス大文典』の記述から、「本文に古典的な物語本文の位相を、絵に演劇的な空間としての位相を設定することによって、物語を二重に表現しようとする作者の意図を看取し得るだろう」（『御伽草子の絵と詞章』『解釈と鑑賞』50―11・昭60・10）と述べ、小峯和明は「画中詞はまさに中世語の饗宴の場」（『画中詞の宇宙―物語と絵画のはざま』『日本文学』41―7・平4・7）と指摘する。にもかかわらず国語学研究がほとんどなされない状況から、平成六年秋の国語学会中国四国支部第四十四大会の講演において、下房俊一が画中詞を「従来の資料よりも、もっと生きのいい口語を捉えることもできる、かもしれない」と、国語学研究の対象としてはという提言をしている（『口語資料としての画中詞』『島大国文』23・平7・2）。

画中詞として残っているものは、たとえば抄物やキリシタン資料には決して量の点で及ばないが、絵画を伴う特性が

生かされた研究が今後も引き続き、課題となるだろう。また、本文との関連も課題である。

その意味で現在もっとも参考になるのが、伊東祐子『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)影印・翻刻・研究』(平8・笠間書院)であろう。その伝本や絵巻の復元、名称の問題についての論述はここでは割愛するが、この絵巻における「詞」と「絵」(における書き込み)には顕著な言語差が認められるという。すなわち、物語本文は「平安時代の物語の系列の文をひきついでいることをうかがわせる」のに対して、画中詞は「室町時代に多用された、あるいは室町時代特有の語彙・語法を有している」という。また、この画中詞にみられる特徴は「あそびたち周辺の人物に限定されている」とする。(第四章)

今後、画中詞を含む個々の作品について、伊東のような検討が必要となろう。ただ、「詞」と「絵」の言語差が顕著に見られないものもある。その際に、画中詞自体の役割の変遷という視点も必要かと思う。また、伊東の指摘と先の出雲朝子の『鼠の草子』における指摘とを合わせて考えると、言語の位相と画中詞の関連について考えてみる必要もありそうだ。

なお、伊東は、本文と画中詞における「侍」と「候」の使用状況における顕著な差があることも指摘し、鎌倉時代物語(テキストは笠間書院『鎌倉時代物語集成』・渋川版御伽草子・室町時代物語(テキストは岩波書店・新古典文学大系『室町物語集上・下』)で「侍」「候」を検討し、その結果が先の言語差と矛盾しないとす。(第五章)

「侍」「候」は成立年代を推定する上で、「ひとつの有効なメルクマール」とする考えについて、その注意深い検証の仕方とともに十分納得できるのだが、たとえば室町時代物語全体について適用できるかという難しい問題があるように思う。

染谷裕子「御伽草子における美人描写——古来の美人にたとえる表現」(『調布日本文化』7・平9・3)、「御伽草子の美人描写(二)——「光る」「輝く」「玉」をめぐる」(『調布日本文化』8・平10・3)、「花鳥風月を以てする美人描写——御伽草子の場合」(『調布日本文化』9・平11・3)は、市古貞次『中世小説の研究』にあげる代表的な美人描写三類をそれぞれとりあげたものであるが、それらがある程度は作品内容とかわる一方、同じ作品でも伝本により異なることもあ

ることを指摘した。広義の御伽草子は先行文学のあらゆる流れをうけついでおり、それが本来は直接影響をうけたジャンル表現を受け継ぎながらも、やがて相互に影響しあいつつ、いわゆる御伽草子の典型的な文体を生み出していくであろうが、それを明らかにするには、やはり個々の作品の伝本を丁寧に見ていく必要性を感じる。と共に、一つ一つの表現について、たとえば、三浦俊介「御伽草子の慣用的表現―「虎伏す野辺」をめぐって―」（『城南国文』14・平5・2）のように、その成立と展開について探っていく必要がある。

また、田淵福子『木幡の時雨』の文章」（『高野山大学國語國文』21・22合併号・平9・3）は、中世王朝物語『木幡の時雨』について、美人の形容等に「室町時代物語」に通じる「匂い」があるとする指摘も御伽草子のそれと関連する。

中世王朝物語にみえる源氏等の影響は必ずしも原本によったものではないことが最近の研究の動向であり、特に、源氏の河内本や注釈書等を見直す向きがあるという。文学研究においては御伽草子と古典注釈書との関連もすでに論じられており、特に「美人表現」等は注釈書との関連で見直すべき必要がありそうだ。田淵は、「女三宮のたちすがた」や「女郎花露おもげなる」等は河内本や注釈書から中世王朝物語は取り入れていると指摘する。染谷は先の論考で、御伽草子にも見えるこれらの表現は、中世王朝物語の影響と考えたが、中世王朝物語自体が田淵の指摘するように、その成立が御伽草子と同時期と見られるものがあることから、再考する必要がある。

加藤昌嘉『しのびね物語』のコトバの網―王朝物語世界の―」（『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）25・平11・4）は、文学の立場で「コトバから物語の内部機構を論じ」たものであるが擬古物語系の作品の文体や語彙について考える際、参考になろう。

さて、ごく最近の研究として、仮名遣いや係り結びの状況から『横笛滝口草子』の諸伝本を対照しつつ、その書記言語としての変遷の実態を明らかにしようとするのが、今野真二である。

「二つの古活字版『よこふえたきくちのさうし』（『日本語研究センター報告』Vol.4・平9・3）は、元和頃の二種の古活字本『横笛草紙』の仮名表記を資料として、助詞の仮名遣い、開合、四つ仮名に焦点をあてて比較し、この時期の仮名遣いの問題について考察した論である。

なお、御伽草子の仮名遣いに関する論考として、池田悠子「刊本『たまものさうし』における表記の傾向」(『表現研究』61・平7・3)がある。承応2年刊本『たまものさうし』(東洋文庫蔵)の仮名表記について、接近した箇所でも同一の語に二様以上の表記を行うことがしばしば見える点に注目して、ある種の基準によるというよりも、「視覚的に富んだ表記を行っている」といえる」と指摘する。今野の先の論考と考え合わせて読むと興味深い。

今野真二にはさらに二本の論考がある。

「係結び崩壊の状況からみた『横笛滝口草子』諸本の変容」(高知大学『人文科学研究』5・平9・6)は、室町末期〜近世初期の係結び崩壊の状況が『横笛滝口草子』の諸本にどのようにならわれているかを考察したものであるが、無批判にテキストを使用して国語史的に考察することに警鐘を与えているといっている。

同じく「国語史資料としてみた渋川版御伽草子―『横笛滝口草子』を例として」(『文学・語学』159・平10・5)は、『横笛滝口草子』の係結びを取り上げ、六本のテキストを対照させると、渋川版の係り結びの状況は元和頃の刊行古活字版二種と近似しており、渋川版刊行当時の言語の反映ではなく、むしろ元和頃の言語を反映しているのではないかという。伝本の系統の研究からもこの可能性は高いとする。

今野は、渋川版を横にくくる研究ではなく、作品のテキストをたてに並べる研究の必要性をとき、文献学的、文学的、語学的に総合的にとらえることが御伽草子の研究にのぞまれる、と提唱する。先行研究のテキストに対する無批判的態度に対する批判でもあろうし、今後の御伽草子における国語学研究のあるべき方向を指摘しているともいえよう。

高橋久子「御伽草子と古辞書」(『日本語と辞書』三・平10・5)は、『温故知新書』と『伊京集』が古版本系『精進魚類物語』中の語・表記を、特殊なものまで含めて、多数収載し、その誤りを、そのまま踏襲していることから、古版本系『精進魚類物語』の成立が『温故知新書』成立の文明十六年(一四八四)より溯ると指摘した。

『精進魚類物語』は御伽草子の中で特殊な作品ではあるが、高橋も指摘するように当作品のような物尽くしの類と往来物・古辞書との関連については今後大いに研究成果が期待される。

以上の他に、高見亮子「室町時代受身文の動作主マーカー」(『国文』85・平8・7)がある。文法史等の過渡期の資料と

して御伽草子を用いる場合、従来旧古典大系本をテキストにすることがほとんどであったが、高見は昭和六十三年十五年で一応の完成を見た『室町時代物語大成』（角川書店）を利用する。この点は新しい流れといえよう。平成一年・平成四年には、岩波書店から新古典文学大系『室町物語集上・下』も出版されたことから、今後の対象テキストは変わっていくことが予想される。